

大学中退、生きてます、八尾高への思い

高 20 期 筒井健二氏（「英会話チャンプ」代表）

1971年、場所はヘルシンキ。(当時は外国に行く人などまだまだ珍しい時代でした)「桜が咲くころあなたが日本に帰ってくることを思うと、目が潤んでしまいます」母からの手紙だった。同志社大学2年を終えた私は、予定通り海外放浪の旅に出て、予定の1年が過ぎようとしていた。私は旅を続けるどうか迷っていた。隣にいたフィンランド人の彼女が、「ケン、自分に自信があるなら別に大学なんか卒業しなくてもいいんじゃない」この彼女の一言が私の運命を変えた。昨日までアルバイトだった皿洗いの仕事は、退学を決めた翌日から私の本職となった。サウナ屋さんでマッサージもした。サンフランシスコではバーテンダーもした。大事には至らなかったが、自分が死ぬと思った瞬間を3回経験した。結局、約4年後に帰国。東京でも人生の旅は続き、大手英語学校教師を経て、今は小さいながらも英語・英会話教室を運営し、15年が経ちます。お蔭様で子供英語の分野では、どこにも負けない教授法を開拓できたようです。また、2年前までは、8月1ヶ月まるまる休暇を取り、がんばりながらイイ加減に生きるのが密かな自慢でした。まだ人生の旅が終わったわけではありませんが、大学を中退して選んだこの旅のコースは、私にとって結構“当り”だったのかもしれないと思う今日この頃です。

さて、昨年偶然にも中学3年生の英語検定教科書「トータル」で、ヒマラヤの王国ブータンでの西岡京治(ニシオカケイジ)氏の活動を知りました。ブータンに日本の農業を広め、国王から「ダジョー(最高の人)」の称号を授与された人です。同じ日本人として誇りを覚え、他国のために自分の人生を捧げられた氏に心から尊敬の念を抱きました。



今年になり、私は運よく拙著「英語を English に変える50のツボ」(グラフィ社・読み物としても楽しめます)を出すチャンスをいただきました。その本を八尾校同窓会に寄贈させていただき、資料館に収められたこと、本部のホームページに掲載されたことなど丁寧な連絡をいただきました。そのホームページで、なんと彼の西岡京治氏が八尾高の卒業生であることが判り、驚くと共にその偶然に感動を覚え、八尾高卒業生であることに改めて誇りを感じました。テレビで、お元気な塩川正十郎先生を見るたびに嬉しく思いますし、やはり私の心に母校として生きているのは、八尾高校なのだとは再確認したことでした。